

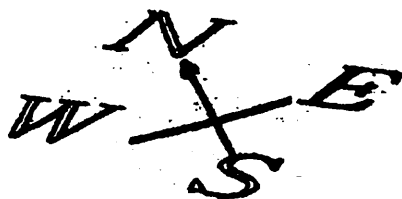
2010年9月1日

第196号

エコネット

藤沢環境運動市民連絡会議

(略称 藤沢エコネット)



主 事
な 記
事

- ・「終わらざる夏」を読んで
- ・感動的なアカテガニの放仔
- ・武田薬品・安全協定案両市提出
- ・パナソニック跡地土地利用のうごき

事務局〒252-0816 藤沢市遠藤849-9 青柳

☎/FAX 0466-87-4922(夜間のみ)

<http://comcom.jca.apc.org/econet/>

問題が山積みの事業仕分け

「行政の外部の人が、公開された場所で、職員に質疑を繰り返し、各事業について意見を出す」それ自体は良い事だと思います。しかし、現実の事業仕分けを見ると、事業の選定、仕分け人の人選、仕分け人への情報提供など、問題が山積みです。

市の仕分けを数回傍聴していて、情報提供の問題を端的に示していたのが、「民間」と判定されてしまった「市民電子会議室関係費」だったと思います。仕分け人が市民電子会議室をどの程度見たのかに注目していたところ、携帯で入ろうとしたがわからなかった、1つの会議室を見たが同じ名前の人が多かった、知り合いに聞いたら知らなかった位で、詳細に見て判断したという発言はついに聞けませんでした。もし詳細に見ていたのなら事業仕分け同様、「行政の外部の人が、公開された場所で、職員に質疑を繰り返し、各事業について意見を出す」行為を、一般市民がネット上で可能な場所である点に気づいたでしょう。

「博物館資料公開活用費」では、市民サービスを切りまくるはずの仕分け人が、逆に美術館を作るような方向で議論していたのは評価できましたが、「自転車対策費」では、放置自転車が長年減らない事をさんざん追及しながら、無料駐輪場がむしろ減っているという点は追及しないという場面に苛立ちました。折しも市が電気自動車(外国製)を市の温暖化対策として1台購入していた、なんていう話も耳にしていますが、電気自動車よりはるかにエコである自転車の駐輪場から金を取るちぐはぐさも、追及して欲しかったのですが。

また私自身は、神奈川県電子会議室で行われる事業仕分けの構成員をやる事が出来ましたが、県が用意する事務事業シートと担当課との質疑だけでは心もとないものでした。しかし、現場を見るなり独自に調べるなりするのなら、担当事業が決ってからの日数が足りません。また県庁の他の課にも電話して聞こうとすると、電子会議室上で聞くよう指示されたりし、構成員に情報収集にベストを尽くさせようとする姿勢なのか疑問もありました。

行政だけが仕分け人に対し事前に文書で情報提供できるという現状では、行政の外部が評価した事にはならず最善の判断ともほど遠い危険があります。(内藤 繁)

「終わらざる夏」を読んで

元占守島守備隊兵士、白崎勇次郎

8月8日東京有楽町朝日ホールで、「終わらざる夏」出版記念講演会で、作者浅田次郎氏の記念講演を聞いた。出版元の集英社代表が講演に先立ち挨拶した。

「この本は面白い本ではない、戦争の本質を突く非常に重たい本だ、にも関わらず発売以来日も浅いのにも早くも3版を重ねた。こんな本がこんなに売れるとは日本人も満更ではないとの想いを強くする」

続いて演壇に立った作者、浅田次郎氏の講演を私流に要約させて貰った。「『終わらざる夏』は重たい小説だった、着想30年で4年がかりで書き上げた。第2次世界大戦での死者数は正確には分かっていない。ソ連の人口の推移から計算すると2、660万人となる、次に多いのは中国で1千万人、ドイツ800万人日本300万人と続く。300万人と云えば全国民の問題となる、多くの家庭から戦死者が出た。戦死者のいない家も詳しく見れば、住んでいる人の身内、兄弟とか叔父とか必ず死者がいるので全国的な問題となる。こんな戦争絶対繰り返してはならない。

戦後65年というが毎年8月15日が近づくと、必ず広島・長崎を頂点とする戦争の話題が大きく浮かび上がってくる。こんな国は世界に類を見ない。

占守島の戦いは戦争が終わってからの戦争である。まかり間違えば抗命の罪に問われる戦争だった。2万3千の精兵がいた占守島へ僅か8千のソ連軍が攻め入って壊滅的な損害を受けた。奇妙なことに勝った日本軍が負けたソ連軍に武装解除されるという実に分かりにくい戦争だった。

戦場体験者との対面は避けた、小説を書く上で障害になると考えたからである。生存者にはお会い出来る機会も来ようが、亡くなった方とは意思の疎通ができないのだから、間違った作品は書けないと慎重に筆を運び4年の歳月を費やし草臥れ果てた。こんなに疲れた作品はかつてなかった」と結んだ。

私は、1944年4月11日「終わらざる夏」の舞台となった北千島占守島を守る通信兵として派遣された。翌年の8月9日、ソ連軍が満州へ侵攻無人の荒野をゆくが如く進撃中との報道を聞き、関東軍がいつ反撃するのか、首を長くして待っていたが反撃の報道を聞くことなく8月15日を迎えた。ポツダム宣言を受諾すると玉音放送を聞き北千島は大混乱に陥った。

通信隊兵舎でも「日本は負けたんだ、いやまだ戦える」と言い争う組が幾つもあり、取っ組み合いをする兵たちもいた。「どうせ捕虜になれば国には帰れない、一生こき使われるに決ってる」「死んだ方がましだ」という言葉も飛び交い収集がつかなくなった。挙げ句の果ては近くの海軍燃料置き場から、リンゴを原料とした代用航空燃料の入ったドラム缶を転がしてきた。水で薄め飲み明かし、前後不覚となり眠りこけた。

3日後の18日未明、アルコール漬けとなった兵士達の眠りを吹き飛ばすように対岸のソ連領カムチャッカ半島ロバトカ岬の長距離砲弾が占守島竹田浜へ撃ち込まれた。竹田浜から私達がいた三好野飛行場まで10キロ以上離れていた、三好野近くまで砲弾が届いたのかドスンドスンと響き大地が揺れた。

私は飛び起きると素早く軍装を整え、雑嚢に2発の手榴弾を入れ銃を執って洞窟内の通信室に駆けつけた。対空2号通信機の前に腰を下ろし、雑嚢から取り出した2発の手榴弾を通信機の前に並べた。

敵兵が洞窟に侵入したら1発ですでに多くの兵を殺し、残り1発で秘密兵器の対空2号通信機破壊と、自らの命を絶つよう命じられていた。日本は降伏したがここは俺たちの土地だぞ、不可侵条約を破って侵入するソ連軍なんかには負けていられるかと決意を固めた。隼戦闘機と交信するため、無線通信の波長を合わせるべく受信機のダイヤルを廻した。

ソ連軍長距離砲音が途絶えて数時間後、竹田浜上陸を目指した敵上陸用舟艇を2度に亘って撃退したとの情報が入った。「関東軍は知らなかったが占守島守備隊は違うぞ！ザマー見ろ」と私は胸を張った。

間もなく洞窟が揺れ動くようなソ連軍による艦砲射撃の轟音と、空からの爆弾投下が始まった。竹田浜に陣取った我が守備隊の砲兵陣地は沈黙させられ、3度試みられたソ連軍上陸部隊は竹田浜に上陸し、我が守備隊と凄惨な白兵戦が繰り広げられた。

通信兵の私には限られた情報しか得られなかったが、膨大な資料を収集された作者の浅田次郎氏は、

小説で余すところなく「占守島の戦い」を世に紹介してくれた。私が一番共感したところは終章に近い下巻410頁だった。独ソ戦の天王山だったレニングラード攻防戦やハリコフの大戦車戦で、熾烈な戦闘を勝ち抜いた勇敢なオルロフ中尉が書いた赤軍上層部への諫言が私の胸を打つ。

『3、所感もしくは追記』

「僭越ながら、同志P・I ジャコフ師団長閣下にお訊ね致します、回答は望みません。同志閣下、および同志幕僚諸君がこの素朴な疑問に対しご再考下されば幸いです。第一に戦争は和平の成立またはいずれかの降伏によって集結を見ます。8月15日にポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した日本に対して、18日になってから新たに武力を行使するというのは明らかな国際法違反ではありませんか。そうではないとする合理的な可能性を、本官はどうしても見いだせません。

第二に、勇敢なる我が赤軍兵士は、去る5月7日のドイツ軍無条件降伏によって、大祖国戦争に勝利しました。ならば、8月8日に至って、有効なる相互不可侵条約を破棄してまでの対日宣戦布告は新たな戦争の布告だったのでしょうか。そうではなく、これもまた栄光の大祖国戦争の一部であるとするなら、本官はこの戦争に限っては栄光なるものの根拠を見出せません。」(中略)

「最後に疑問を述べるのではなく、赤軍将校として意見を具申致します。

本戦闘に於ける日本軍の圧倒的な強さは、すぐれた装備や練成度もさることながら、その溢れみなき闘志によるものでした。既に無条件降伏をした軍隊が戦端を開くというのは、国家の意思に対する反逆であります。しかし戦う兵、死にゆく兵の表情には、反逆者としての陰りは、些かも感じられませんでした。その正当な闘志の源は何かと問えば、このクリルの島(千島列島)が紛れもなく日本の領土だからであります。軍人の本能でもなく野心でもなく、ましてや狂気でもなく、領土を侵されてはならぬというこの上なく正当な理由によって、彼らは果敢に戦いました。」

この項は六十五年前の8月20日(推定)私が通信兵最後の仕事として、北海道帯広の本隊宛最後の電信を送った際の心情に一致する。

「ツウシンキザイハカイジュンビカンリョウセリ、コレヨリホヘイブタイニゴウリュウシ、サイゴノトツゲキヲカンコウセントス、ハケンタイインイチドウシキマスマスサカン、イチメイヲソコクニササゲユウキユウノタイギニイキルカクゴナリ」

送信を終わると通信機材破壊作業は分隊長に任せ、侵攻してくるソ連軍戦車に体当たりするため火炎瓶を携え、飛行場前面に掘り巡らされた最前列の塹壘に身を潜めた。戦車が姿を見せたら一番に飛び出そうと待ちかまえていたが、ソ連軍戦車はついに姿を見せなかった。緊張の糸が切れかかったとき「停戦命令だ！ 出てこい」とふれ歩く伝令の声につられ塹壘を出ると、ホッとした顔の分隊長が待っていた。

1945年8月23日、ソ連軍に武装解除されて捕虜となった北千島2万2千の勇士たちは「占守島の戦い」で倒れた戦友たちの死を、無駄死にはなかったのかとの思いを抱き続けてきた。「終わらざる夏」に接し得た戦友は、恐らく占守島の戦いは『故郷を守る正当な戦い』だったと胸を撫で下ろしたことと思う。

講演後の対談で作者浅田次郎氏は、草野満代アナウンサーの「浅田さんは魅力的な人間を数多く登場させながらみんな戦死している、何も全部殺さなくても良かったのでは？」と、少し非難めいた質問をした。浅田さんは一瞬言葉に詰まったが、「人間にとって生と死が一番肝腎、特に死の方が大切だ」と答えたようだったがはっきりとは覚えてない。どんなに魅力的な人間でも戦争になればみんな死ぬそれが戦争なんだよ。だから戦争は反対だ。と思いながら作者はこの重たい小説を書き終わったのだと私は思う。

あの日から65年が過ぎた、占守の戦いを思い起こすたびに『天皇のために命を捧げる』という軍国主義の復活に通ずる、どんなに小さな動きも見逃してはならない。平和をめざす運動の一翼を担いたいとの想いを強くする。

追記 藤沢から同行の保坂さんが、出版元、集英社の担当者に頼み込み短時間ではあったが、作者と対話でき感想文を直接手渡しすることができた。そして思いもかけずにNHK取材陣に取り囲まれ、生き残り兵士としての、占守島戦争への思いと「終わらざる夏」の感想を求められた。(8月19日NHKテレビで放映)

感動的なアカテガニの放仔

7月28日(木) 藤沢エコネット関係者7名が、小網代の森アカテガニの放仔観察会に参加しました。この催しはNPO法人小網代野外活動調整会議の主催でした。小網代の森は2005年、首都圏唯一の完結した自然状態の流域生態系として国土審議会が近郊緑地保全区域に指定したところです。

三崎口駅より調整会議のカニパトロールの案内で小網代の森のトレイルを通りました。ここは夏の3ヶ月間はマムシ、スズメバチが危険なため一般の通行は自粛を要請されています。

現地に着くとカニの下りてくる道の邪魔にならぬよう、アシ原には絶対入らぬよう「カニは陸、人は海」と厳重注意をされて水に入りました。



←水に入って観察中

母ガニは 大潮の夕暮れに、引き潮が始まる日没直後にお産を始めあつという間に終わります。観察は約1時間で終わります。アカテガニなので背が赤いと思ってしまいましたが、灰色のものもありました。大きさは最大で甲羅が4cmだそうです。小さめが多かったです。

NHKの「ダーウィンがきた」の小網代の森の映像だと、驚きの数でしたが、この日は何十匹単位で少ない数でした。出てきてもなかなか水に入ろうとしなかったり、だんだんに暗くなってくるのでヤキモキすることもありましたが、水中に入ると体中をブルブル震わせて、ケシ粒のように小さい「ゾエア幼生」を放す瞬間は感動的でした。

もちろんゾエア幼生は肉眼では見えませんし、水が濁ったのも分かりません。後で調整会議の方がコップに取ってみせて下さいましたら、ケシ粒のようなゾエアが多数浮いていました。ゾエアは約1ヶ月海で暮らし、メガロパ幼生となって岸边に戻ります。

この間自力で生存するのは至難の技で、多くが魚の餌になり、何万と生まれたうち戻れるのは極く少数です。

帰路も森を抜けましたが、ホタルが見られたのも感動でした。

野外活動会議の、ルート整備、湿原回復作業、海浜植生の回復維持などの活動のお

かげだと感謝いたしました。会に協力できる方は賛助会員になる、寄付をする、ボランティア活動に参加する等して欲しいと言われたことをお伝えいたします。

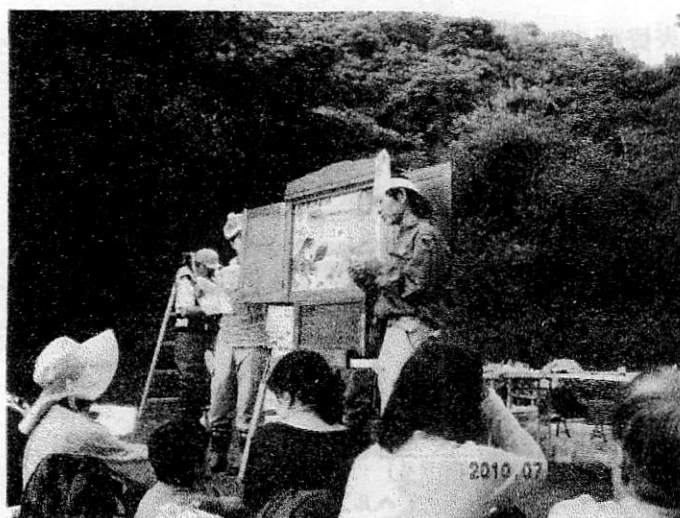
眞谷美根子



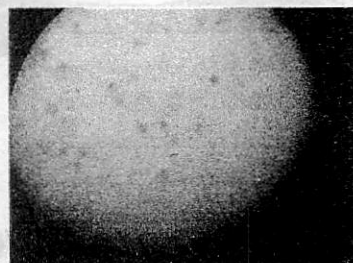
アカテガニ広場で



山から出てきたアカテガニ



紙しばいでカニの説明をきく



ゾエアを顕微鏡で見ますと

パナソニック跡地の土地利用のうごき

パナソニックグループ松下電器の工場が撤退し空き地となっていたが、この土地は約19ヘクタールあり、土地利用についての活用注目されていた。

藤沢市は、このたび、環境に寄与する先進的なまちづくり「F U J I S A W Aサステイナブル・スマートタウン」を推進するモデル事業としての案を公表した。

企業の持つエネルギー技術と、IT技術を世界に発信する「サステイナブル・スマートタウン」のモデルとして、企業の省エネ、創エネ、蓄エネの技術を活かし、再生エネルギーの導入を図る電力融通の仕組みの構築、都市における低炭素化を推進する、公民連携で計画を進め、国に対して支援を要請している。

事業主体のパナソニックは、戸建て住宅をメインに中高層住宅、小規模商業施設の整備を想定し2014年に完了を予定し「日本初の環境創造まちづくり」が具体化された。藤沢市はJRの南北をつなぐ道路を整備することになる。

次ページにつづく

県に対しては次のことを藤沢市は要望した。

1. パナソニック跡地における土地利用転換に伴う（仮称）新南北線の整備、地区計画等、都市計画手続きにおける県の支援
2. 地区に隣接する県道戸塚茅ヶ崎線の道路拡幅の事業化
3. 「F U J I S A W A サスティナブル・スマートタウン」の形成に向けた財政措置をはじめとする県の支援
4. 国に対する県・市連携による支援要請
5. 「神奈川県地球温暖化対策計画」を踏まえた「F U J I S A W A サスティナブル・スマートタウン」への県施策の導入
6. 地区近傍の都市計画道路藤沢厚木線未着手区間の「かながわみちづくり計画」への位置づけと早期事業化

（日比 遥）

パナソニックグループ新中期計画発表資料 2010.5.7

「街まるごと」へのアプローチ

29

世界に広がる
スマートタウン構想

街全体での

CO₂・廃棄物
削減

エネルギー
地産地消

安心・安全

効率的
社会インフラ

機器・システム・ソリューション
まるごと提供

コミュニティサービス提供

街づくりへの参画・貢献

自治体・デベロッパー・
パートナーとの協業で実現

FUJISAWA サスティナブル・スマートタウン構想

- ・藤沢市・デベロッパーと協業
- ・当社工場跡地(6万坪)を活用



「藤沢」で新事業モデルを構築し、世界へ展開



武田薬品用下水道管費用差止め住民訴訟が結審～判決は10月～

住民9人が平成21年9月に起こした住民訴訟が、8月2日第6回口頭弁論で結審しました。この日バイオ排水の危険性を明らかにするため、バイオハザード予防市民センター新井秀雄氏等3人の証人陳述を要請しましたが、必要なしと却下され、10月6日に判決を迎える事になりました。

藤沢市は公害を防止するため、昭和53年前後に地域住民および企業50社とそれぞれ協定書を結び、工場排水（工程排水）は自己処理し、公共下水道には受け入れないとしています。ところが、藤沢市は巨大なバイオ研究所排水を公共下水道に受け入れる協議書を武田薬品工業と結び、武田薬品用下水道管費用を予算化したため、藤沢市を被告として住民訴訟を起こしました。

裁判では、被告（市）は研究所は生産工程を持たないから工場排水（工程排水）ではないと主張。また環境アセスを実施したのだから安全性は確保されていると主張しました。

原告（住民）は工場排水よりバイオ研究所排水のほうが危険であると主張、その危険性を列挙しました。また、環境アセスは安全を保障したものではないし、「水質汚濁」を選定していないと主張しました。

裁判中に工事は行われ、3月に完了、工事代金1億2747万円の予算執行がされてしまいました。そこで5月に、不当な工事代金の支払いをおこなった海老根市長に損害賠償を求める訴えの変更の申し立てを行いました。

6月7日、原告は協定書の趣旨やバイオ排水の危険性を立証するため、証人3人の陳述申請を行いました。聞き届けられず、3人の陳述書を提出し、8月2日結審しました。

10月6日の判決に向け、公正な判決を求めてハガキ要請運動を展開します。裁判官が、公害防止の観点に立ち、過去の公害事件の悲惨な結果を踏まえ、子や孫にも誇れる公正な判決を求めるものです。9月25日までに是非ご協力をお願いします。（青柳節子）

住民・行政・武田の三者安全協議会設置を —両市に安全協定案提出—

7月23日、武田問題対策連絡会としての安全協定に関する申し入れを、藤沢市、鎌倉市に提出しました。申し入れの中で、排水については、動物排水も含め自社処理施設を作り循環再利用を行い、協定違反の大清水浄化センターへの排出は行わないこと、排気については、空気清浄装置を導入し排気の循環再利用を増やすこと、さらに動物実験焼却については、焼却は外部委託する様申し入れました。また、研究所の安全操業を進める上で、行政・武田・住民（学識経験者も含め）三者による安全協議会の設置を求めました。特に、大清水協定を、住民抜きで一方向的に失効させようとしている中で、このようなことが起こらないように住民も含めた三者協定の必要性を訴えたものです。

安全協定問題に関し、藤沢市は周辺地域自治会、大清水浄化センター周辺自治会に素案を配り、また鎌倉市は武田研究所敷地300m範囲の全世帯に配布して住民の意見を聞きたいとの意向を示していますが、会としては、周辺住民はもとより影響を受ける周辺3km圏内の住民・境川・江ノ島海岸地域など関係住民、市民団体からの意見を幅広く聞く公聴会を開催するよう要望して行きます。

藤沢、鎌倉、横浜各市民の健康と環境を最優先に考えた対策を、武田薬品各行政に求めて行くことを共通のテーマに、多くのグループが幅広く連携を保ちながら、それぞれが独自に活動していくことがいま大切だと考えております。ご協力よろしくお願いします。

（武田問題対策連絡会代表 小林麻須男）

持続可能な未来を求めて～映画「ミツバチの羽音と地球の回転」

9月15日(水) 2:15～・17:40～

鎌仲ひとみ監督の講演あり

横浜情報文化センター6階(日本大通り駅0分)

主催 上映実行委員会 ☎045-922-2083 田代

太陽光発電の明日を考えるシンポジウム～集合住宅にも太陽光発電を～

基調講演 千葉利宏氏(住宅ジャーナリスト)

パネリスト 千葉利宏氏(住宅ジャーナリスト)

菱田剛志氏(見積工場代表)

名古屋明氏(JX日鉱日石エネルギー(株))

中村宇裕氏((株)大京)

コーディネーター 横谷公雄氏(太陽光発電所ネットワーク副代表理事)

とき 9月24日(金) 13:00～15:00

ところ 横浜情報文化センター(みなとみらい線 日本大通りすぐ)

主催 神奈川県地球温暖化防止活動推進センター

先着200名 ☎045-321-7454



武田問題住民訴訟 10月6日(水) 13:15から

横浜地方裁判所 傍聴をお願いします 連絡先 080-5099-4264

武田薬品対策連絡会

9月8日(水) 18:30から 市民活動推進センター

主催 武田問題対策連絡会

第6回 あやせ環境展

10月23日(土) 10:00-15:00

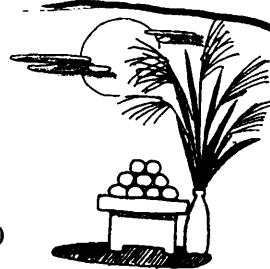
10月24日(日) 9:00-15:00(商工フェア同時開催)

綾瀬市役所1階 市民ホール

内容 展示 講演など

主催 あやせ環境展実行委員会

連絡先 綾瀬市環境政策課 環境政策担当 ☎0467-70-5620



藤沢エコネットから

会員募集→会費3000円 振込口座は→郵便局へ→00240-9-46501 藤沢エコネット

事務局会議 9月15日(火) 17:30～ 市民活動推進センター会議室

《編集後記》8月末に藤沢で気温35度を体験するとは思わなかった。前日には光化学スモッグ注意報が発令された。夏休み明けの子ども達、冷房なしでどれだけ耐えられるか。某学校では、いち早くパソコンは暑さでダウンし、避難訓練は運動場に集合せず、屋内の体育館に変更。この異常気象、9月予算市議会では開発予算が多いが、身近な学校にトイレ修理費を、と共に冷房設備を求むの声が聞こえそう。

(A)